

## 《巻 頭 言》

### 分析センターの新たな発展を願って

工学部長 森 末 道 忠

分析センターが認可になってその施設棟が1985年に完成されて以来、物性・材料関係の研究推進に果たしてきたセンターの役割は非常に大きく、その成果も目をみはるものがあります。

当初、化学系教室で各々管理運営をしていた高性能の機器を分析センターに集約し、理工系のすべての教官の研究と教育に等しく役立てようとする目的は十分に達せられております。その間、歴代のセンター長、センタースタッフ、運営委員の並々ならぬ努力によって次々と新しい機器が導入され、またセンターの運営も機器予約の管理システムを独自に開発するなどスタッフの尽力によってまことに円滑に行われています。

先端技術の開発は最高レベルの機器無しでは達成されない時代となっています。理・工学部には既に大学院理工学研究科が設置されて独創性のある世界に通ずる研究成果が期待されており、材料物性関連分野を専攻する研究者にとっては最高レベルの分析機器は不可欠となっています。したがって個人単位では導入できない高価な機器を共通で使用できるセンターの意義は大きいと思っています。分析センターは当大学を訪れる国内国外の学者や研究者の見学施設の一つに常に選ばれており、これも種類が整ってきた分析機器、ゆとりをもって配置された機器設置室、それに管理の行き届いた機器の状態など理・工学部が自信をもって見学していただける施設だからです。

以上のように、分析センターは施設としての基礎づくりが一応できたと考えられます。

これからは飛躍のための新しい時期に入ります。その方向の一つは本センターの有効利用による真の独創的な研究成果の達成であり、他の一つは社会に開かれた大学としてのセンターの貢献であります。丁度地域共同研究センターを来年から設置するように概算要求中ですが、今後は民間企業との共同研究を積極的に実施して地域産業の活性化と振興をはからねばなりません。特に埼玉県企業の頼りがいのある大学として学問上技術上の協力は申すに及ばず、企業が持たない機器や施設を備えて共同利用の要求に応える必要があり、この意味からも分析センターの役割は大きいと思います。

現在は、分析センターが大学の内外で大きく発展するための転換期と考えられます。今後更に新しい高度な機器の導入、最上の維持管理を行う分析センタースタッフの増員、既に飽和している面積の増加など多くの問題を解決しなければなりません。新たな発展に向けて全学の協力を得つつセンター利用者各位が努力されますように念願しています。